

第三章

原始・古墳時代

第一節 神話にあらわれた横川

一 木浦権現の跡と鏡が岡

神話によると、高天原^{たかまがはら}におられた天照大神^{あまてらすおおかみ}は、天孫瓊杵尊^{みけのみこと}に葦原^{あしはら}の千五百秋^{ちひさひき}の瑞穂国^{みづほくに}（日本の呼称）へ猿田彦命^{ひこのみこと}を案内役として高千穂の峰に天降らせ、しばらく都をここに定めた。

横川の地には、万幡豊秋津師比売命^{よろずばたとよあきつしひめのみこと}がこられたとの口碑がある。万幡姫は天照大神の御子天忍穗耳命^{みこのおしほみみのみこと}の後として天降られた。一行がまだ下界に降りきらないで天空にいるうちに、万幡姫は一柱の御子を生んだ。その名を天津日高日子番瓊々杵尊^{あまつひこひこばんにぎのみにこと}（邇邇芸命^{ににぎのみにこと}）という。そこで新たに生まれたこの瓊々杵尊^{にぎのみにこと}（邇邇芸命^{ににぎのみにこと}）を、父君の忍穗耳命の代わりに、天降らせた。

命が高千穂^{いさほ}に在したときに、万幡比売命は横川の地に在し、安良の地北園^{あしたのその}の岡に休まれた。そのとき、持参し

ていた鏡をもって、高千穂に向かい照らして居場所を示した。このことから、この岡をいままって「鏡が岡」という。

その一の鳥居は阿弥陀原^{あみだはら}の西、弓削ヶ丘^{ゆげがおか}の下、西の凹地に立っていたといわれる。

木浦権現神社^{きうらごんげん}の跡は、木浦秋男宅の南、貝吹岡に続く丘陵^{おそ}の裾で、冬暖かく夏冷たい泉がこんこんと湧き、正牟田川の源流をなしている。このあたり一帯は雑木自然林で、明治の初めごろまでは老杉がおい茂り、霧島松といって天を覆う巨大な松があったといわれる。

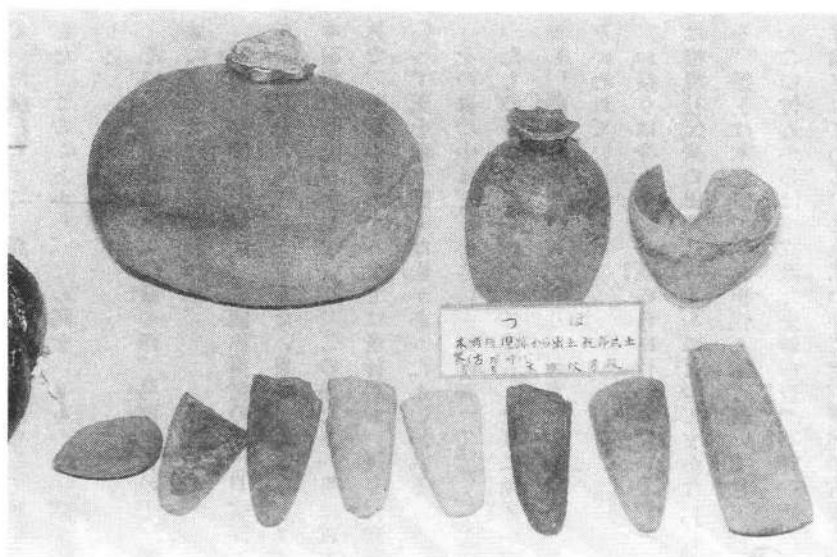
その森の中ほど、小さい「田の神」（ほかから持ち来ったもの）が笑みを浮かべて座し、そばに鍬^{きびほこ}が立ち、美しい薺^{こけ}が生えているあたりがお宮の中心であったらうといわれている。

お祭りは今も一二月酉^{とと}の日に行われている。その費用は権現社伝来の田地八アールによってまかなわれている。祭主は木浦家で、先祖代々受け継いできている。

この付近からは、立派な土器の壺^{つぼ}や石斧^{いす}の破片が沢山採取されている。これについては、後述の古墳文化の中



木浦権現社



須恵器と石器（木浦出土）

で詳述することにする。

また、木浦権現社の旧田地のそばに夫婦石という石があった。この石を他の地に運んでおくと、必ず元の場合へかえると言ひ伝えられていた。この夫婦石が、なぜか今は見当たらない。

二 弓削ヶ丘

別の名を、湯貝の峯、茶園の丘ともいい、今は正牟田の福吉清二氏の所有になっている檜木山の小高い岡である。頂上は円形で幅一〇間（約二〇メートル）の土塚になっている。

古老の口碑によれば、この丘は彦火火出見命ひこほでみのみことの御陵ではないかと伝えられている。昔から、このあたりの人は、ここを霊地として、立ち入ることがなかったという。なお、旧記並びに阿弥陀ヶ原の碑文などによると、彦火火出見命の御陵は、鹿兒島神宮を去る四里の所にあるというのであるが、ちょうどその位置にあたっている。

このことはまた一説によると、明治の初め宮内庁から係官が調査に来たとき、集落の人々は後難を恐れて確たることを証言せず、その山陵は溝辺郷麓村ふもとに在りと決定されたと伝え聞く。

「明治元年、明治政府に於て山陵調査のため、後醍醐真柱、三雲藤一郎及び三島通庸を派遣し、同三年重ねて



弓削ヶ丘

田中頼庸及び山之内時習、次いで同六年、樺山資雄来りて明治六年七月二十九日、宮内庁に於て三山陵が決定される」と誌されている。

第二節 原始時代

『古事記』や『日本書紀』に書かれている神話・伝説は、その材料を六世紀ごろに集大成したものである。日本列島にはぐくまれた日本民族の歴史は遠く古い文化の上に築かれたものである。

遺跡の発掘調査が積み重ねられ、地層の観察、測定などによりそれぞれの年代別の特徴が分類され、編年されてきた。その結果、世界で最も古い人類は、今から約二〇〇万年ぐらい前（日本では一〇万年ぐらい前）に出現したといわれている。

鹿児島県内で人類が生活するようになったのは、出水市場遺跡や指宿市小牧遺跡の調査から約二万年前と推定されている。

現在から一万年ぐらい前までを「旧石器時代」という。

このころの人々は、植物の栽培法を知らず、狩猟や採

集によって食糧を得ていた。また、道具は石を打ち欠いて作った石器を使った。石器はこの時代の終わりに近づいていくようになった。

木浦権現社の跡付近から発掘された石斧の原型をみると、旧石器時代に使用されたものと推考する。

一 縄文時代

約一万年前から約二〇〇〇年前ぐらいまでおよそ八〇〇〇年間は縄文時代といい、早期、前期、中期、後期、晩期の五時期に区分されている。土器作りの技術がすすみ、器形や文様も多様化してきた。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（一九八一）において、中ノ字中尾田に所在する中尾田遺跡から検出された遺物としては、先土器時代、縄文時代、古墳時代、

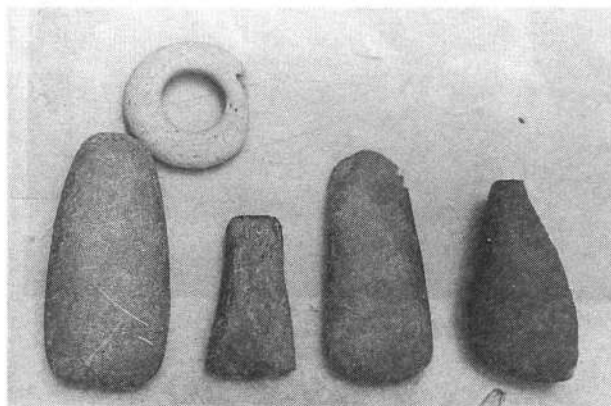
中世期のものがある。特に縄文時代の遺構、遺物は多種多様なものが出土した。

主たる遺構としては「集石」があり、これは調理用の施設ではないかと考えられている。また、「炉穴」は、四個の楕円形をした穴が重なって発見された。柱穴の中には木炭片や木炭の粉末が多量にみ

られ、火をたいた跡と思われる。縄文時代中期の土器として、「並木式土器」「阿高式土器」が出土している。

二 弥生時代

西暦紀元前三〇〇年ぐらい前から紀元後三〇〇年ぐらいは弥生時代といい、この時代の特徴としては水稲が栽培され、土器・石器のほか鉄器や青銅器などの金属器が用いられるようになったことである。



石 器 類

水稲の栽培が始まると、人々は水田の近くに集落をつくって居住し、やがてこの中から有力者が現れ、さらに有力者の中から豪族が出て地域を治めるようになった。



壺形土器

第三節 古墳時代

弥生時代に各地に現れた豪族は、しだいにいくつかの強い豪族に支配されるようになる。豪族たちは、その力を示すために、土を盛った大きな墳墓をつくった。この時期を古墳時代という。

古墳の内部には、竪穴式石室や箱式石棺などがある。ここに死者を埋葬した。中ノ字谷ノ口には地下式横穴がある。

また、木浦権現の跡付近から出土した「壺形土器」は須恵器とみられ、種もみ貯蔵用に使われたものとされている。